

色彩とその象徴性の研究：調査方法と文化的側面の差異に注目して

The Study of Color and its Symbolism: The Viewing Point about the Difference of the Reserch Methods and Cultural Aspects

鈴木 恒男 Tuneo Suzuki
中川 明美 Akemi Nakagawa

慶應義塾大学

Keio University

キーワード：色彩連想、色彩象徴、調査方法

Keywords: color association, color symbolism,
research method

1. はじめに

色彩の象徴性の研究は実用的には製品設計に際して最適な色彩を見つけ出したり、色彩調和の研究の基礎になり、基礎研究としては色彩情報がどのように記憶されているかを検討する基礎になるものでとえられる。

この色彩象徴を調査する方法としては、赤から連想されるのは何か（色彩からの連想）と喜びを最も表す色は何か（象徴語からの連想）がある。この何から内を想起するかを連想の方向性の効果とする。想起の際に実際の色彩を提示するか、色名だけで行うかを色彩規定の効果とする。色彩象徴の研究には、これらの想起の方向性と色彩規定の方法の違いが充分には検討されていないと思われる。

本報告はこの連想の方向性と色彩規定の違いを検討し、さらにその違いを際立たせることを期待して、色彩象徴に強く影響すると考えられる文化の影響が異なる日本と台湾との比較を加味して調査方法の差異を検討した。

2. 実験の概要

色彩からの連想は、赤、黄、緑、青、白、灰、黒から連想される言葉を答えるものである。その際、提示される7色が色名の場合（色彩からの連想：色名）と色票の場合（色彩からの連想：色票）がある。色票はPCCSハーモニックカラー201-Lから系統色名の赤、黄、緑、青を表すV2, V8, V12, V17と白を表すW, 灰色を表すGy5.5, 黒を表すBkを提示した。解答は、思いついた言葉を述べ、実験者が書き取る形式である。

象徴語からの連想は、17の象徴語を選定して、その言葉を最も良く表す色を色名で答える場合（象徴語からの連想：色名）と、配色カード199a（日本色研事業製）から1色を選択する場合（象徴語からの連想：色票）がある。象徴語は正の意味を持つと考えられる言葉（喜び、吉、若々しい、正義、味方、純潔、神）、負の意味を持つと考えられる言葉（悲しみ、不吉、死、不正、敵、怒り、うるさい）、正でも負でもない言葉（男、女、勇猛）である。評価者は色彩からの連想：色名、象徴語からの連想：色名は日本人48名、台湾人48名、色彩からの連想：色票、象徴語からの連想：色票は日本人25名、台湾人25名である。言葉は日本で実験を行う時は日本語で、台湾では中国語で表記してある。

3. 結果

結果の処理は、象徴語からの連想：色票では選ばれた色票のPCCSの色相とトーンが結果として得られるが、今回の解析にはトーンを考慮しないで色相だけを利用した。さらに、色相は例えば、紫みの赤（V1）、赤（V2）、黄みの赤（V3）は赤として処理する。その為、最終的な色相は赤、橙、黄、黄緑、緑、青緑、青、青紫、紫、赤紫の10色相となる。色彩からの連想は、7色に対して連想された言葉が得られる。赤では日本では血、情熱、炎、太陽、台湾では情熱、めでたい、血、愛情が多くの方が答えた上位4個までである。このままでは、方法の違いによる解析がやりにくいので、連想されたものを具体的な事物に関するもの（太陽、雪、空等）か、感情や抽象的な概念を表すもの（情熱、純潔、

上品等)かに分類して、方法の違いを解析した。表1は、具体的事物を連想した百分率(この値を100から引けば抽象的な概念を表した内容を連想した百分率となる)を各色毎に、色彩規定の方法である色名と色票、調査対象である日本と台湾を比較した表となっている。

この表から、色名が提示された場合には、台湾より日本の方が具体的事物を連想する傾向がある。これが、提示されるものが色票になると、日本と台湾での具体的事物を連想する傾向の差が縮まることが分かる。この傾向が顕著なのは台湾の赤であり、色名では、めでたい、新年とうようなめでたさを表す言葉が連想されたが、色票が提示されるとめでたさを表す言葉が減少し血、リンゴ、薔薇のような具体的な言葉が連想される。

象徴語からの連想では、象徴語を最も表す色を連想した人数の順位で並べ、その上位2位までの色を負を表す象徴語3語、正を表す象徴語3、その他を表す象徴語1語毎に、色名を答えた場合を(色名)、色票から選択した場合(色票)で日本と台湾を比較して示したのが表2である。

各象徴語で選ばれた色が色票の場合は色相とトーンではある範囲でバラツキがあるが、それ

を特定の色相で代表すると、色彩からの連想ほどには、方法や文化での違いが見られないことが分かる。この傾向は、他の象徴語でも同じである。

4. 考察

今回の結果では、色を提示し、その色から連想される象徴語を求める方法は、色が色名か色票かで差がでる事が分かった。これは色名では赤が提示されるが、それから想起される赤の範囲は最も赤らしい赤を中心してある程度の広がりをもっている。その広がりには文化的な影響が強く反映した結果であると考えられる。

喜びを表す色は赤であるが、赤からは喜びが出にくいという現象のような、象徴語から色彩を想起させたのと、色彩から象徴語を想起させたのでは結果が異なる現象、色票を提示すると具体的な連想が多くなる現象は色彩に関する記憶を考える際には今後検討する必要がある。

色彩象徴の研究は調査結果だけが先行する傾向があり、これは実用を重視する立場からは必要なことであるが、これからは、その情報がどの様に記憶でのネットワークが形成され、どれを想起すると、どの要素が想起され易くなるのかの色彩象徴のモデル構築が必要になるものと思われる。

表1 各色から連想された言葉の分類結果(具体的事象想起の百分率)

		赤	黄	緑	青	白	灰	黒
色名	日本	67	59	83	83	78	80	50
	台湾	25	42	49	46	32	33	22
色票	日本	63	63	63	86	63	50	50
	台湾	60	60	67	70	32	50	40

表2 象徴語から連想された色の上位2色

象徴語		悲しみ		死		怒り		正義		神		味方		男	
		1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
色名	日本	灰	青	黒	白	赤	黒	白	青	白	黄	緑	青	青	黒
	台湾	灰	青	黒	白	赤	黒	白	青	白	黄	青	黄	青	黒
色票	日本	灰	紫	黒	灰	赤	黄	白	青	白	灰	青緑	黄	青	青緑
	台湾	灰	紫	灰	黒	赤	青	青	緑	黄	白	青緑	黄	青	灰